



新しく寄贈された 「百田家文書」

～幕末・明治期の皿山をもの語る資料群



百田家文書の一部

このほど、福岡市早良区在住の百田孝さんより、明治期の有田皿山を知る貴重な資料206点を寄贈していただきました。これらの資料は以前、有田町歴史民俗資料館が調査を行い「百田家文書」として目録を作成し、複写した資料を収蔵していましたが、個人で所有するよりも有田町で所蔵して活用してほしいという申し出が百田家よりあり、貴重な原本をいただくことができました。

百田家は幕末の有田皿山のリーダーの一人、初代百田恒右衛門を祖とし、泉山に居住していました。『肥前陶磁史考』（昭和11年刊）には初め貞七、恒右衛門と称し後に多兵衛と名乗り、明治13年4月26日に63歳で没したとあります。その彼の人となりや著者の中島浩氣は「天資英明才智衆に勝れ、当代の達識者であった」と評しています。

有田皿山の歴史の中で、百田恒右衛門が活躍したのは幕末から明治にかけてですが、まず大きく歴史に登場するのが明治元年のことです。時に百田恒右衛門50歳。当時窯焼きが赤絵屋(上絵付け業)を兼ねることができなかった時代に、窯焼きの八代深川栄左衛門、同深海墨之助ら改革派の一員としてそれを認めさせようとし、さらに、長崎貿易の一枚鑑札を10枚に増加し、窯焼き名代札を220枚から240枚へ、赤絵屋名代札を16枚から22枚へ増加してほしいと佐賀藩へ願い出しました。

しかし、時期尚早だったのか、これらの願いは貿易のみが許可されました。ただ、時を経ずして佐賀藩の治世から明治政府管轄下の時代となり、ご法度だった事柄が表面上は自由な作陶ができる時代へと変化していきました。

明治期の有田窯業界は、それまで窯焼き個人の窯として経営されたものが、少なくとも会社組織の形とな

った香蘭社と精磁会社が代表していると

いってもいいのではないのでしょうか。共に新しい時代の要請に沿ったデザインや形の名品を産み出し、それらの製品は当時各国で開催された万国博覧会に出品され、現在世界各国の美術館や博物館に所蔵されているものも少なくありません。

明治8年に八代深川栄左衛門や手塚亀之助、深海墨之助、辻勝蔵らと創立された香蘭社が、その4年後には分離して、八代栄左衛門以外のメンバーで精磁会社が創設されたことは周知のことですが、その精磁会社の差金人として、『特命全権大使 米欧回覧実記』の著者でもある久米邦武と百田恒右衛門の名があります。この差金人の実態はよくわかりませんが、大漢和辞典には「差金」のことを「①指揮して行わせる ②支払うべき金額の幾分かを差し入れること ③不足を補うために出す金銭」とあります。いずれにしても、精磁会社の経営に関して、二人が大きな影響力を持っていたことは確かなようです。

それを裏付けるかのように、他の関係者の家には残ることのなかった「香蘭社社則」や新しくフランスの製造機械の購入に関する資料など、百田家には香蘭社や精磁会社の経営に関する書類や、精磁会社の製品が数多く残されていました。

また、百田家は手塚亀之助家、深海墨之助家やさらに岩谷川内の大窯焼きであった藤崎太平家などとも婚姻関係があり、それらの家族の古い写真なども同時に寄贈していただきました。

今後さらに資料の詳細を調査することで、新たな皿山の歴史が解明できるものと思います。改めて、百田家の皆様の英断に感謝いたします。(尾崎葉子)



百田家文書はこのほど東京・目黒にある久米美術館で開催された「久米邦武と桂一郎・有田瓷器」展にも出品しました。香蘭社や精磁会社に関することは「有田町史 陶業編Ⅱ」に詳細が記載されています。また館報「季刊 皿山 No.36 No.46」などで手塚亀之助や深海墨之助などに関することを紹介しています。

皿山

季刊

No.76

冬
2007

有田町歴史民俗資料館・館報

19年度企画展

「有田の匂い～一ノ瀬泰造写真展」 開催

このほど11月1日から30日まで武雄市で開催された「TAIZO+TAKEO」展に呼応した形で、有田町歴史民俗資料館では平成19年度企画展「有田の匂い～一ノ瀬泰造写真展」を開催しました。

昭和48年にカンボジアで消息を絶った一ノ瀬泰造さんは、戦場を被写体とした写真が数多く世に知られています。しかし、戦争という非日常の中でその視線は、何気ない家族の様子や子どもたちのつぶらな瞳の輝きにも注がれていて、それはまた戦場とは対極の平和産業である陶磁器の産地・有田でも同様でした。

そして戦場カメラマン・一ノ瀬泰造さんが、実はそのライフワークにと考えていたのが有田でした。今回の展示は武雄市に住む母一ノ瀬信子さんのご厚意によるもので、平成16年に開催した折に展示したものに、新たな数点を加えたものです。武雄市で公開された戦場の写真とは全く異なる昭和40年代の有田の風景は、何を語りかけようとしているのでしょうか。

2つの会場で公開された写真は、一人のカメラマンによって同じところに撮影されたもので、同じ眼差しによるものです。戦争と平和という全くかけ離れた世界であっても、その心底に流れる人間の非情さと優しさは表裏一体であるということも静かに語りかけていました。



会場と窓越しの紅葉

会期中ごろになると当館の周囲は一年で一番美しい、紅葉の季節となります。有田町内の方々はこの紅葉も楽しみながら写真展も見学しようと、中旬以降はさらに多くの方々に見ていただきました。

期間中、オンリーワン事業で武雄市から見学にきた若木小学校の4年生は、月末には武雄市歴史資料館の「TAIZO」展の見学も予定されているということで、これらの違いも見てほしいと話しましたところ、熱心に見学していました。

また、今回の企画展開催中、ボランティアで玄関や館内に季節の花を百田節子さん(南山)に活けていただきましたが、モノトーンの会場に文字通り華を添えていただきました。

来館者の感想

タイゾーさんと戦場の写真を撮っていた者ですが、タイゾーさんのカンボジアの人々に対する優しい目線の原点がこの写真展を見て良くわかりました。また有田の町が何とカンボジアに似ていることか！クメール陶器の素晴らしさに通じるものがあります。是非一度クメール陶器展もやってください。(馬淵直城さん)

写真を見て昔をなつかしむ父。昔の思い出がよみがえり、いろんな話を聞かせてくれました。本当にその当時の有田の匂いを感じました。(K Mさん)

有田の町を想うあたたかい目、戦場で人々を撮るあたたかい目、どちらも同じ「人」の目ですね。武雄の展示を見られた方もぜひここ有田の展示も見てほしいです。泰造さんの「人」を知ってほしいです。(S Kさん)

モノクロ写真に自分の有田で生活したなつかしい思い出と当時の陶器市の賑やかさをふと思い出しました。しかし、平和というものは大切です。そう写真は訴えています。(M Kさん)

有田の昔の様子がまるで写真の中で動かしているかのように感じました。自分の知っている風景や祭りとか、人々の生活の写真を見て、今はちょっと元気のない有田だけけど、伝統ある素晴らしい町なので、この写真のようにまた活気づいてほしいなと思いました。TAIZOさんの写真展、本当に来てよかったです。(U Hさん)

有田の四季の移り変わりを優しく写真に残して本当に感動しました。(佐世保市 井上さん)

すごい写真ばかりでまた、来たいです。(武雄市若木小学校 古場まりあさん)

初挑戦!!

有田中学校2年生による 有田の町屋模型作り

有田町歴史民俗資料館では、毎年夏休み期間中に有田の町屋の模型作り教室を開催しています。これは町内各小学校の5,6年生を対象に開催していますが、このほど有田中学校の2年生が、模型作りに初挑戦しました。

中学校の文化祭の一環で取り組むことになったのですが、9月半ば、担任の堀江先生から生徒への作り方の指導依頼が当館にありました。

10月16日、町中におくんちの「チロリン節」の音色が流れる日の午後、当館から中学校へ出向きました。家庭科室に集まった子どもたちに、当館の本島、北村の両担当者から、作り方の要領、室内の家具の作り方、トンバイ扉や樹木の要点を説明し、質問を受けながら作業が進みました。



有田中学校2年生の町屋の模型作り



完成した町並み

当館の模型教室は有田町の内山地区が平成3年度に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、そ

の後修復作業を進めていく中で、有田皿山の風情が残る町並みのよさを、次代を担う子どもたちにも知ってもらいたいという思いから始めたものです。それが、さらに中学生にも広がっていったことに大きな喜びを感じています。

10月28日(日)、有田中学校の文化祭が開催され、体育館内に完成した町並みが出展。今までの模型教室では数を多く作ることは時間的な制約があつて難しかったのですが、さすがに中学生ともなると家数も多くなり、また作り方もより精巧さを増し、見事な町並みが再現されていました。

第12回 皿山ウォーキング... 開催しました

恒例になった春秋2回の皿山ウォーキング（生涯学習課と共催）ですが、今回は旧有田町を歩きました。参加者は町内各地から39名。紅葉に彩られた有田町歴史民俗資料館を出発し、中樽の山小屋、小樽などの古窯跡を見ながら中樽陶芸作家村を通り、少しきつめの坂道を登りました。

登りつめた後は下り坂で、大谷溜池の湖畔沿いに歩みを進めます。普段なかなか歩く機会の少ない山道を、周囲の紅葉を愛でながら歩きました。この辺りは安政6年(1859)の古地図に、西大谷という地名が記されています。大谷溜池から流れている猿川沿いには、江戸時代に陶石を砕く60余基の唐臼が点在したことが記録されています。静寂の中に唐臼の動く音が谷間にこだましていた時代を彷彿とさせる風景が残る約4キロメートルの道のりを、さわやかな汗を流しながら歩きました。



秋の皿山ウォーキング

未来に伝える文化遺産 〈有田町の文化財〉紹介

逃げ餅

秋も深まり、各地で収穫を神に感謝する祭が行われています。今回、紹介する「逃げ餅」もそのような祭のひとつで、毎年11月22日の夜に、下本区(旧下本村)で行われています。6つの班があり、毎年当番となる班を回しており、当番の班では逃げ餅の会場となるエイショと呼ばれる家を決め、その両隣がヨリコとなりエイショを助けていましたが、ここ数年は区公民館の庭先で行われています。

当日の夜になりエイショの庭先で餅つきが始まります。1回目は棒状の杵を持った男達が「ショイ、ショイ」とかけ声を発しながら餅をつきますが、餅を臼の外に出して泥だらけにしようとして、ひぎで臼を倒したり、杵で餅を高くさし上げたりします。彼らの周りにはそれを防ごうとするベテランの壮年が張り付き、臼を中心にもみ合いとなります。泥まみれの餅は、主婦達の手で丸められると、曲川神社に供奉られ、各戸にも分けられます。きれいな部分を食べると無病息災で暮らせると言われています。昔は、残りも牛馬に食べさせました。2回目は、臼の中に蒸した餅米が投げ入れられると同時に、つき手達が杵を放り出して、餅米を手づかみにして、逃げ去ってしまいます。これが「逃げ餅」と呼ばれるゆえんです。

全国に餅つき行事は沢山ありますが、このような形の行事はほとんどなく、逃げ餅は「奇祭」と言われています。その起源やいわれなどは資料がなくよくわかっていません。新嘗祭(毎年11月23日に、宮中で天皇がその年の新穀を供奉神に感謝する儀式。以前逃げ餅は、22日の夜12時から行われていた。)の日に行われることから、収穫を神に感謝する祭として始まったとも考えられます。この祭の形も時代とともに変化していますが、五穀豊穰・無病息災を願う心と共に「逃げ餅」は続いて行くことと思います。(宮崎 光明)



古文書教室受講生

研修旅行に行きました

有田町では地域に残る歴史を学ぶ古文書教室を開催しています。現在初級と中級の2クラスが、それぞれ毎月1回の教室で有田皿山に関する古文書の解読に挑戦しています。

初級クラスは町内赤絵町の蒲地豊先生を講師に、「川内家文書」の安政6年の日記を読み、中級クラスは伊万里市の前山博先生を講師に迎え、「皿山代官旧記覚書」を読み進めています。

今回、有田の成立と深いかわりがある豊臣秀吉の朝鮮への出兵を中心とした企画展が、唐津市の名護屋城博物館で開催されているということで、それぞれの受講生を対象とした研修旅行を計画しました。

11月5日(月)、少し肌寒い日でしたが、27名の参加者で「秀吉と文禄・慶長の役」展の見学に行きました。会場では今回の企画を担当した安永浩学芸員から展示資料に関する詳しい説明を聞き、秀吉が朝鮮国を経由して明国へ攻め入ろうとした戦いの経緯を学びました。この企画展には韓国の重要文化財クラスの資料も出品されていて、日韓両国の新しい関係が築かれつつあることも実感しました。

平成28年の有田焼創業400年は、日韓の関わりを中心に開催するということもあり得るのではと思わせる、とても充実した企画展でした。



名護屋城博物館の企画展「秀吉と文禄・慶長の役」を見学

季刊『皿山』

通巻 76号 (平成 19年 12月 1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185